

Title	英語”S+V+0”と日本語「～を一する」, 「～に一する」
Author(s)	岩倉, 国浩
Citation	Osaka Literary Review. 6 P.109-P.118
Issue Date	1967-06-05
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25813">https://doi.org/10.18910/25813</a>
DOI	10.18910/25813
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 英語 “S+V+O” と

## 日本語「～を一する」, 「～に一する」

岩 倉 国 浩

(1)

He killed the bear. の文は英語ではふつう “S+V+O” 構文<sup>①</sup>という。これを日本語では「彼はその熊を殺した」という具合に「～は+～を+一する」で対応する。“S+V+O” の O は目的語で動作の対象即ち客体であり、この V は他動詞であるが、日本語のこの「を」も客体を示す格助詞で、「殺す」のように「一する」のところにくる動詞は他動詞であるから、この場合英語の “S+V+O” に対し日本語の「S+～を+Vt」という日英両語の構文の要素の型が一對一に対応している。しかしながら英語の “S+V+O” における “Vt+O” のあり方が、すべて日本語の「～を+Vt」に対応するというような簡単なものではない。たとえば、He left his house. (彼は家を出た。〔cf. たくさんの人が出た〕) / He entered the room. (彼は部屋に入った〔cf. 大金が入った〕) / She married him. (彼女は彼と結婚した。〔cf. 二人は結婚した〕) / He survived his wife. (彼は妻より長生きした。〔cf. 母は長生きした〕) などなどである。そしてこれらの “S+V+O” に対応している日本語の動詞に共通していえることは、それらが自動詞として自立できることである。即ち英語の “S+Vt+O” に対し、それぞれ「S+～を+Vi」, 「S+～に+Vi」, 「S+～と+Vi」, 「S+～より+Vi」の構文で対応しているのである。

この小論の目的は、英語の “S+V+O” に日本語の「S+～に+Vi」が対応する場合をとりあげて、両者を比較し、「～を」「～に」の分化の契

機を考察することである。

## (2)

英語の“S+V+O”構文における V は他動詞であるが、他動詞とは「目的語をとる動詞」と定義される。従って目的語の有無によって一つの動詞が他動詞にも自動詞にもなりうる。たとえば She smokes tobacco. が She smokes. となり、He left this place yesterday. が He left yesterday. となれば自動詞なのであり、逆に die a glorious death, smile thanks のように本来自動詞のものに目的語をとらせれば他動詞になるし、又前置詞の有無によっても、自動詞・他動詞の区別が生じる。たとえば descend (from) a hill/flee (from) the country/jump(over) a fence などである。

このようにみえてくると英語の他動詞・自動詞の区別は統語的 (syntactic) なものであることが分る。

さて次に日本語の場合を考えてみる。元来日本語には、他動詞・自動詞の区別はなく、この区別に対する言及はその萌芽をわずかに江戸時代の国学者にみる程度で、この区別が広く行なわれるようになったのは明治以後西洋の文法論を輸入してこれを日本語にあてはめるようになってからである。従って西欧語にならって目的語をとる動詞を他動詞というが、この目的語は動作の対象を表わす語で格助詞「を」を用いて表わす。しかし「を」をとっても「坂を登る」「空を飛ぶ」などは目的語ではないし、「工事を急ぐ」、「授業を終わる」、「運命を嘆く」などは自動詞という。又英語では他動詞・自動詞の区別の一つの規準として受動態の有無があるが、日本語では「息子に死なれた」「彼に先に行かれた」のように自動詞でも受身の文を作ることができる。以上のことから分るように、日本語では syntax の上から他動詞・自動詞を区別するきめ手がなく、従って文全体の意味を考えて、その文中での動詞の機能によって他動詞・自動詞を区別する。英

語の他動詞・自動詞の区別が syntactic なものに対して、日本語のそれは semantic なものであるということが出来る。

従って英語の他動詞・自動詞と日本語のそれとは価値が異なるのである。英語の他動詞の中には、日本語の「意味を考慮した機能」というふるいにかけると、日本語では自動詞に分類されるものがかかり含まれている。ここから、日英両語を比較する時、英語では他動詞が、日本語では自動詞がよく発達しているといわれることにもなるのである。<sup>②</sup>

## (3)

次に英語の“S+V+O”構文を日本語に移す時、どのような過程を経るのかを考えてみる。われわれが He killed the bear. という文をみた時、まずこの文の伝える「意味」を理解し自分の中に吸収する。そして次にこの「意味」を日本語の内部言語形式に合うように調整し「S+～を+Vt」構文をえらび出して、「彼はその熊を殺した」とする。このことは日本語の文を英語の構文になおす時も全く同じである。即ち必ず一度「意味」を仲介にして日英語それぞれに自然なパターンにはめなおしているのである。もしこのような過程を経ないで、“S+V+O”の個々の単語の意味が分っているとして、これを機械的に「SはOをV(する)」と対応させるならば、He obeyed her. は「彼は彼女を従った」、He met her. は「彼は彼女を会った」となるはずである。更に、He kissed her. は「彼は彼女にキスした」ではなく「彼は彼女をキスした」となるはずだし、He touched the runner. は「彼はそのランナーにタッチした」ではなく「彼はそのランナーをタッチした」となるはずである。しかしそうならないのは、われわれが上に述べた調整を行なっているからにほかならない。即ち上に述べたような過程を経ることなく、英語を日本語に、日本語を英語に移すことはできないのである。

## (4)

英語の“S+V+O”を日本語の構文に移す時、上述のような過程を経る以上、英語の“S+V+O”を意味を考慮した機能の立場から検討しなおすことが必要である。

まず Tom killed the bear. という典型的な“S+V+O”構文をとりあげる。この時「トム」と「熊」は「殺すもの」と「殺されるもの」という相関関係をなしており、これは他動詞 kill が本質的に要求するもので、kill の中にすでにこの二項が潜在的に含まれている。この種の“S+V+O”の S と O との相関関係は最も緊密で、この O を仮に  $O_1$  と呼ぶことにする。

次に He gave me the book. という文に於ては三つの項の相関関係を含んでいる。「与えるもの」と「与えられるもの」という相関関係があるが「与えられるもの」に2種類あり、この行為の Terminus としての「与えられるもの」the book と、この行為に関与しているが直接の目的でない「与えられるもの」me である。この me をふつう間接目的語というが、He gave the book to me. として、もし gave the book to を一語の動詞で表わすことができ<sup>①</sup> He V me という構文ができたとしても、He と me の間の関係は変わらない。即ちこの me のような目的語を  $O_2$  と呼ぶことにする。たとえば I put a bell to the cat. において I と the cat の関係は S と  $O_2$  の関係であり、この時 bell を動詞として put a bell to の意味で使って I bell the cat. (私はその猫に鈴をつける)としても I と the cat の関係はやはり S と  $O_2$  の関係とみる。そして直接目的語たる  $O_1$  はすでに動詞 bell (鈴をつける)の中に含まれているのである。

最後に He entered the room. の文をとりあげてみる。He entered は He went in というだけでこれだけでは、非常にぼく然としていて、the room がこの entered に特定の場所という相対的規定を与えてはじ

めて文として意味をなす。従ってこの種の“S+V+O”に於てはOは「入るもの」に対する「入られるもの」という相関関係の一項というよりむしろ、Vに相対的規定を与える補語の機能を有しているといえる。たとえば、前後のcontextから「入られるもの」が分っている時にはそれを一々いわない、He entered (=went in). という文がなりたつことや、The room was entered by him. という受身の文がふつうには使われないことから、Heとthe roomの間の相関関係は余り感じられないことを示しているといえよう。enterは意味的にはYou go into the room. のintoをgoの中に吸収してできた一語の動詞、即ち「自動詞+方向を示す前置詞」と等価のものと考えることができる。cf. outlive (vt. ～より長生きする) <out+live (vi); overrun (vt. ～より遠くまで走る) <over+run (vi)

従ってこの種の“S+V+O”のOは目的語というより補語に近く〔ただし“predicative”でなく“completor”としての「補語」〕、仮にこれをO<sub>3</sub>と呼ぶことにする。“S+V+O”をOの機能によって、大きく三つに分けてみた。この三つの間にそれぞれ中間的なものが存在することは当然考えられることで、それらをO<sub>2</sub>'、O<sub>3</sub>'などと呼ぶことにするが、それについては後でふれる。

## (5)

さてここで英語の“S+V+O”構文が日本語では「S+～に+V」で対応する具体例をあげてゆく。

A. “S+V+O”のOがO<sub>2</sub>であるもの。

I. “S+V+O”が実は“S+V+I.O.+D.O.”構文のD.O.が省略されているにすぎないもの。

pay him (彼に支払う); tell you (あなたにいう); show her (彼女にみせる); teach you (あなたに教える); promise her (彼女に約束す

る) ; ask him (彼にきく)

II. “S+V+O” の V の中に  $O_1$  がすでに含まれていて, “S+V+O” の O が  $O_2$  であるもの.

a. 名詞を臨時に動詞に使った感じの強いもの.

bell the cat (猫に鈴をつける) ; lunch a friend (友に昼食を供する) ; saddle a horse (馬にくらをおく) ; stone him (彼に石を投げる) ; man a ship (船に人を配置する)

b. 名詞的機能が弱くなり, 動詞としての用法が確立しているもの.

shock him (=give a shock to him) (彼にショックを与える) ; benefit him (彼に利益になる) ; telephone him (彼に電話する) ; wire him (彼に電報を打つ) ; compliment her (彼女におせじをいう) ; load a cart (荷車に荷をつむ) ; stamp a letter (手紙に切手をはる) ; sign a receipt (受取りにサインする) ; influence his health (彼の健康に影響する).

c. 名詞も動詞もふつうに使われどちらが先か一がいにいえないが, 同じように分析できるもの.

kiss her (=give a kiss to her) (彼女にキスする. cf. 彼女にキスをする) ; touch him(彼にさわる)cf. ランナーにタッチ「を」する ; thank him (=express gratitude to him) (彼に感謝する) ; reward you (あなたに報いる) notice you (あなたに気づく) ; mind the dog (その犬に気をつける) ; salute him (彼にえしゃくする) ; challenge him(彼に挑戦する) ; concern me (私に関係がある) ; avail you(君に利益になる) ; protest a decision (決定に抗議する) ; court her (彼女に求愛する)

A'. “S+V+O” の O が  $O_2'$  であるもの.

He obeyed her の文における he と her との関係は He gave (=yiel-

ded) obedience to her. (彼は彼女に服従をした) の He と her との関係と同じであるが, take place (=happen) が「Vt+O」を感じさせないほど意味的には一語の自動詞化しているように, He gave obedience to her の「gave obedience」の部分<sup>①</sup>が完全に一語の自動詞に熟しきっているのが He obeyed her だといえよう. 従って“S+V+O<sub>2</sub>”ほどSとOとの相関関係は強くなく, context で O が明らかな場合はそれを表わさずに He obeyed. という文も自然である<sup>②</sup>. 従ってこの種の“S+V+O”のOをO<sub>2</sub>'とよぶことにする.

obey one's parents (両親に従う) cf. (古) obey to him; disobey him (彼に従わない); resist her (彼女にさからう); defy him (彼にいとむ); oppose a scheme (計画に反対する) cf. object to it; serve him (彼に仕える); follow her (彼女についていく) cf. go after her; accompany him (彼に同行する) cf. go with him

B. “S+V+O”のOがO<sub>3</sub>であるもの.

enter the room (部屋に入る); reach the station (駅に着く) cf. get to the station; approach the cottage (小屋に近づく) cf. approach to her; attend school(学校に通う)cf. go to school; ride(=mount) a horse (馬に乗る) cf. ride (=mount) on a horse; clime(=ascend) a mountain (山に登る)

N. B. いわゆる運動の動詞 (Verb of Motion) は何らかの場所や方向によって相対的規定をうけることが多く go や come のような完全に自立できる動詞でさえもしばしば go to the office, come into the room のように相対的規定を受け, この時, to the office, into the room も O<sub>3</sub> と同じような機能を果しているといえよう.

B'. “S+V+O”のOがO<sub>3</sub>'であるもの.

He resembles his father. に於て he と his father の間に相関関係は



なく従って受身の文もありえない。He resembles. というだけでは意味をなさず, his father という相対的規定があってはじめてこの文が意味をもつのである。従ってこの his father は目的語ではなく補語というべきで, これを仮に O<sub>3</sub>' とよぶことにする。

become (=suit) her (彼女に似合う); fit you (あなたに合う); lack common sense (常識に欠ける); total 500(合計500ポンドになる); number fifty men (合計50人になる); deserve the punishment (その罰に値する)

C. I meet him. の文は以上のどれにも属さないと考えられる。この“S+V+O”に於て S と O が主体・客体というよりも, S も O も共に主体という感じが強い<sup>⑥</sup>。即ち「彼」は meet (会う) という動作の相手, 共同者をさし, 日本語では「(通りで)彼に会った」とも「彼と会った」ともいうし, 英語の meet も Father and son met. (父子が対面した)とか We seldom meet. (我々はめったに会わない) ということができる。cf. my motorcar collided with a tramcar. (私の自動車が電車に衝突した)

次に同様の例をいくつかあげる。

confront one's enemy (敵にと直面する); encounter him (彼にと出会う); interview him (彼に と 会見する); match the colour (その色にと調和する); parallel the railway (鉄道にと平行する); adjoin the school (学校に と 隣接する)

N. B. 次のような例も比較すべきである。

marry her (彼女と結婚する) cf. They married. ; fight the enemy (敵と戦う) cf. The dogs fight.

(6)

以上のように見てくると英語の“S+V+O”が日本語で「S+～に+Vi」

となる場合はこの O が実は筆者のいう O<sub>2</sub> や O<sub>3</sub> であることが分った。即ち英語の“S+V+O”の中には、第一義的な目的語 (=O<sub>1</sub>) 以外のものをその O としてもっているものがあることが明らかになった。このことには英語の Actor-Action-Goal という語順の確立が密接に関係している。即ちこの語順の確立は、動詞に先行する名詞が主語、動詞に続く名詞が目的語と直観的に感じさせるまでになっている。Tom beat Jack. という文で beat の辞書的意味が不明でも語順から Tom と Jack の関係は明らかで、これに動詞の意味が分れば、この全文の意味はただちに正しく把握される。従って“S+V+O”の構文は2者間の関係を表わすのに実に便利な形で、S と O<sub>1</sub> という“S+V+O”本来の相関関係以外の関係にも広く応用されて使われるため、“S+V+O”の S と O との関係が多様になるわけである。

一方これに対応する日本語はふつう Actor-Goal-Action という語順を一応とるが、「太郎が次郎をなぐった」とも「次郎を太郎がなぐった」ともいえるように、語順に2者の関係を示す力はなく、それは助詞に委ねられている。ふつう動詞が文尾にくるため「太郎が次郎を」のように動詞の前ですでに2者間の関係は明らかであって、動詞は2者間に起った動作、出来事を叙述するにとどまる。日本語では文中の体言にはふつう助詞がついて文中での機能を明確にしかも微妙な差異を適確に示す。格助詞だけでも「が、の、を、に、へ、と、より、から、にて、で、や、」などがあり、このうち「に」だけをとりあげても「月に着く」「危篤におちいる」「中立の立場に立つ」「通行人に助けを求める」「君に比べたら」「文学に熱中する」「上下にゆれる」「前祝いに活気づく」などなど、それぞれ微妙なニュアンスの差をよく表わし得る。即ち日本語の構文は助詞のため高度に semantic なものとなっている。

英語の“S+V+O”は語順の確立によって体言相互の関係をまちがえることがないため「ジャックー殺したートム」「ジョンー従った一両親」

「ジェイン—着いた一駅」という具合にいわば助詞なしの構文に等しく、体言相互の微妙な関係はすべて言外にあって各自がこれを読みとらねばならぬ。然るに日本語では、これにその意味を十分に考慮して一番ぴったりする助詞をつけて体言相互の微妙な関係まではっきり表示するわけである。たとえば、その場その場で「ジャックは」としたり「ジャックが」としたり、また「駅へ」と「駅に」を使い分けるといった具合である。

結論：英語の“S+V+O”構文が syntactic なものであってこの O の中には O<sub>1</sub> 以外に O<sub>2</sub>, O<sub>2</sub>', O<sub>3</sub>, O<sub>3</sub>' など種々のものが含まれており、これを助詞の機能によって semantic な日本語の構文に移すと、“S+V+O”の O に O<sub>2</sub>, O<sub>2</sub>', O<sub>3</sub>, O<sub>3</sub>' などを含むものが、日本語で「S+～に+Vi」の構文になるということができよう。

#### 註

①. 厳密にはこの V は Predicate Verb 即ち PV というべきであるが、今は慣用に従って“S+V+O”として論を進める。

②. その外元来日本語では原則として無生物を主語にすると、他動詞をとらず、又受身の文もなかった。（出発がのびる／日どりがきまる／時計がみつかるなど）又、能力、好嫌、希望を表わす場合客体を主格におき、従って他動詞を用いない。（数学ができる／犬が好きだ／水が欲しい etc.）これらのことも英語の他動詞に対し日本語は自動詞が発達しているといわれる根拠となろう。

③. I send money to him. を日本語では、send money to を一語の動詞にして「私は彼に送金する」ということができていることを比較すべきである。

④. 次はその一例

But the girl who now *entered* was unique. —E. Waugh. *The Loved One*

⑤. 次はその一例

Only the Indian boy *obeyed*. —G. Greene, *The Power and the Glory*

⑥. 'He is met by me' という文がふつうでないことも思い合わすべき。

⑦. 現代英語では与格と対格の区別がない（共に目的格）ことも大いに関係がある。